

## シンポジウム2 「ナショナリズム・アメリカニズム・公共性」

報告者と論題：金井光太朗（東京外国語大学）「建国期合衆国の戦争・公共性・国家」

中條 献（桜美林大学）「公民権運動・ナショナリズム・公共性」

大津留（北川）智恵子（関西大学）「国際秩序形成にみるシヴィック・  
ナショナリズム神話」

コメント：大澤真幸（京都大学）

司会：樋口映美（専修大学）

本シンポジウムは、まず大会準備委員会の大八木豪委員による趣旨説明があり、「アメリカ合衆国のナショナリズムと公共性」およびその相互関係を歴史的に検討すべく開始された。第一報告者の金井氏は、植民地時代から 1812 年戦争を経て 1818 年の年金法成立までの主たる戦争に注目し、共和主義的公共性がナショナルな公共性へと変化していく過程を検証した。第二報告者の中條氏は、「国民的な」という広い意味での公民権を念頭におき、公民権運動によって公共空間における「自由と平等」の及ぶ範囲が押し広げられた結果、国民国家としての統合が促進されたという側面を確認したうえで、昨今「福祉」国家への反発によって国民国家システムの新たな状況が生じていると指摘した。第三報告者の大津留氏は、「選ばれた国」という自意識をもつアメリカ合衆国が、冷戦後その「アメリカ」の「公共性」を普遍的なものとして他国に強要している現状をどのように克服していけばよいのかという緊急の問題を提起した。

これらの報告に対して、社会学の立場から社会比較論を展開する大澤氏は、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートの論じた「エンパイア」を例にとり、アメリカ合衆国には西洋的近代帝国主義（Imperialism）とポストモダンの「エンパイア」が同居する、その矛盾をアメリカ史研究者はどのように説明するのかという大きな問題を投げかけた。それは、たとえば、国内における「公共性」を押し広げてきたはずの多文化主義が「エンパイア」統合の普遍的イデオロギーとして機能しうることを批判する視点、言い換えれば、多様な国民国家なり民族なりが、見えない「帝王」のもとで平等に奴隷化するという「エンパイア」における「公共性」を批判する視点からの問いかけであった。

さらに、フロアーからも質問やコメントが多く寄せられ、「公共性」の変化をいかに捉えるか、「公共性」は再編されたと言えるのか、国民国家内の「公共性」とグローバルな「公共性」の関連をいかに捉えるのか、「公共性」は1種類ではなく複数存在すると考えるべきではないかなど、「公共性」をめぐる議論は尽きず、予定時間を 30 分も超過した。歴史研究において「公共性」という大きな命題を見直すことの意義が提示され、刺激的なシンポジウムとなった。